救援者の災害ストレス（PTSD，CIS）の予防とケアに関する臨床心理学的研究（Ⅲ）
～ＰＴＳＤに視点をあてて～

鹿児島純心女子大学大学院　餅原尚子
鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科Ｍ２　松田英里
同　上　成願めぐみ
同　上　Ｍ１　久木崎利香
同　上　有留香織
同　上　永田純子
同　上　坂元真紀
同　上　前原加奈
同　上　松元理恵子
鹿児島純心女子大学大学院　久留一郎

和文要旨

災害の体験によって直接の被災者だけでなく，救援者も大きな影響を受ける。海外での先行研究と同じく，わが国の救援者においても心的外傷性ストレス症状（post-traumatic stress reaction）の割合が高いことが明らかになっている。救援者は災害現場に出場し，被災者と同じような体験をすることによるストレスを受けることになる。一方，職業的救援者であるがゆえに一般的な被災者とは別のストレス（災害出場を忌避できない。彼らには社会的な期待が大きい）に加え，特有の義務感，責任感や弱音を吐きにくい組織的風土が加わる。まして，箝口令が敷かれているとなおさらである。本研究では，消防職員，海上保安官，警察官，救急救命士が直面するＰＴＳＤ（Posttraumatic Stress Disorder：外傷後ストレス障害）の現状について分析し，ストレスの特徴を明らかにすることを目的とした。

アンケート調査を実施し，そのうち消防職員356名，海上保安官80名，警察官854名，救急救命士200名の有効回答を得ることができた。

警察官より消防職員や救急救命士が，ＰＴＳＤの症状を呈しやすいことが明らかになった。惨事を体験し，その1ヶ月後にＰＴＳＤにスクリーニングされた者は，平均して3.8%であった。予備群を含めると，海上保安官や警察官に比べ，消防職員や救急救命士，警察官の出現率が高く示された。

Ⅰ．問題

災害救援者にとって非常事態における心的外傷体験は，職業柄いつもそのような状況にさらされているため，それほど強いネガティブな衝撃は与えないだろうと考えられがちである。しかし，実際にはＰＴＳＤを発症する例は多い（Gersons, 2000）。

心的外傷後ストレス反応は，一般市民の被害者・被災者だけに生じるものではない。2001年９月の米国同時多発テロ事件はニューヨーク市の消防士と警察官に大きな悲劇をもたらした。当然ながらこのような大惨事によるストレスは，消防・救急隊員にも深刻な心的外傷後ストレス反応を生じうる。特に問題となるのは，このようなＰＴＳＤ症状は単なるストレス反応としてだけではなく，抑鬱感や仕事への意欲低下として消防・救急隊員の日常業務に影響を及ぼす危険がある（飛鳥井，2001）といわれていることである。

ＰＴＳＤは，DSM-Ⅳ-TR（APA,2002）によると，以下（表１）のように述べられている。

表１　外傷後ストレス障害の診断基準

A．その人は，以下の２つがともに認められる外傷的な出来事に暴露されたことがある。
（１）実際にまたは危うく死ぬ，または重傷を負うような出来事を，一度，または数度，または自分または他人の身体の保全に迫る危険を，その人が体験し，目撃し，または直面した。
（２）その人の反応は強い恐怖，無力感または戦慄に関するものである。
注：子供の場合はむしろ，まとまりのないまたは興奮した行動によって表現されることがある。
B．外傷的な出来事が，以下の１つ（またはそれ以上）の形で再体験され続けている。
（１）出来事の反復的，侵入的，苦痛な想起で，それは心像，思考，または知覚を含む。
注：小さい子供の場合，外傷の主題または側面を表現する遊びを繰り返すことがある。
（２）出来事についての反復的で苦痛な夢。
注：子供の場合には，はっきりとした内容のない恐ろしい夢であることがある。
（３）外傷的な出来事が再び起こっているかのように行動したり，感じたりする（その体験を再体験する感覚，錯覚，幻覚，および解離性フラッシュバックのエピソードを含む，また，覚醒時または中毒時に起こるものを含む）。
注：小さい子供の場合，外傷特異的な再演が行われることがある。
（４）外傷的出来事の１つの側面を象徴し，または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合に生じる，強い心理的苦痛。
（５）外傷的出来事の１つの側面を象徴し，または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合の生理学的反応性。
C．以下の３つ（またはそれ以上）によって示される，（外傷以前には存在していなかった）外傷と関連した刺激の持続的回避と，全般的反応性の麻痺：
（１）外傷と関連した思考，感情，または会話を回避しようとする努力。
（２）外傷を想起させる活動，場所，または人物を避けようとする努力。
（３）外傷の重要な側面の想起不能。
（４）重要な活動への関心または参加の著しい減退。
（５）他の人から孤立している，または疎遠になっているという感覚。
（６）感情の範囲の縮小（例：愛の感情をもつことができない）。
（７）未来が短縮した感覚（例：仕事，結婚，子供，または正常な寿命を期待しない）。
D．（外傷以前には存在していなかった）持続的な覚醒亢進症状で，以下の２つ（またはそれ以上）によって示される。
（１）入眠，または睡眠維持の困難
（２）易刺激性または怒りの爆発
（３）集中困難
（４）過度の警戒心
（５）過剰な驚愕反応
E．障害（基準B，C，およびDの症状）の持続期間が１ヶ月以上。
F．障害は，臨床上著しい苦痛または，社会的，職業的または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。

▲該当すれば特定せよ：
急性：症状の持続期間が３ヶ月未満の場合
慢性：症状の持続期間が３ヶ月以上の場合
▲該当すれば特定せよ：
発症遅延：症状の始まりがストレス因子から少なくとも６ヶ月の場合

DSM-Ⅳ-TR(APA, 2002)の解説で，外傷体験が例示されている部分には，「（前略）目撃した出来事には，暴行，事故，戦争または災害による他の人の大きな怪我や不自然な死を観察すること，または死体や死体の一部を思いがけず目撃することが含まれる（後略）」とあり，救援者にもこのような条件があれば，ＰＴＳＤの症状が現れることが十分に予測される。

筆者ら（餅原ら，2005）の消防職員を対象にした研究では，惨事に直面した際，「被害に遭われた方の状況を自分のことのように感じてしまった（$p<0.05$）」「誰にも体験や気持ちを話せなかった（$p<0.001$）」「この仕事に就いたことを後悔した（$p<0.01$）」「仕事に対するやる気をなくした。辞めようと思った（$p<0.01$）」「あの時ああすればよかったと自分を責めてしまった（$p<0.05$）」という気持ちになった者は，ＰＴＳＤにスクリーニングされていることが明らかになっている。

さらに彼らは職務を強いられ，また気持ちを吐き出したり，リラックスする機会を奪われやすい。危険や脅威と戦い，それを鎮めることに深く関わる仕事では，危険な状況から自分自身が逃げ出すという選択はできないのである。災害救援者にとっては任務の主要な目的は危険と闘うことであり，状況を再びコントロールできるようにすることである（Gersons,2000）。

Ⅱ．研究目的

本研究では，職業別のＰＴＳＤの出現率とその症状について明らかにすることを目的とする。

Ⅲ．方法

１．対象

消防職員（某市消防職員及び某県中級幹部）に対しては2003年６月，惨事ストレスに関する研修会開催前に，参加者全員に配付し，その場で回収した。某海上保安本部海上保安官（特殊救難隊：危険物積載船の火災などの救助をはじめ，転覆船や沈没船内からの人名救出，ヘリコプターから降下しての避難者の救助など高度で専門的な知識技能を必要とする救難業務を任務とする者）に対しては2003年11月，某市勤務の警察官には2005年８月，某県救急救命士会会員（有資格者のみ。ただし，消防職員対象の調査で同アンケートを記入した者は除く）に対しては2005年８月に，いずれも管理職を通してアンケート調査を実施し，回収後はそのままトラウマ・ケアの専門家（筆者ら）へ渡されるという条件で依頼をしてもらった（個人の情報が職場内に漏れることのないよう配慮した）。いずれも無記名による回答である。有効回答数（惨事体験者），性別，既婚・未婚の有無を表２に示す（消防職員の中には救急救命士も含まれるが，消防職員の場合は，「消防－救助－救急」のローテーションを組むということから，救急救命士と分けて調査し，分析を行った（無解答は除く）。

表２　有効回答数

対象者	有効回答数(人数)	男性	女性	既婚	未婚
消防職員	356名	98.3%	0.3%	80.9%	14.0%
海上保安官	80名	95.0%	3.8%	75.0%	20.0%
警察官	854名	94.7%	3.4%	73.5%	18.7%
救急救命士	200名	99.5%	0.0%	88.5%	9.0%
合　計	1490名	96.2%	2.2%	77.4%	16.4%

性別では，男性がほとんどであり，既婚者が77.4%であった（無記入は除く）。

平均年齢は表３の通りであり，40歳代前半が

多かった。

表３　　対象の平均年齢

対　象　者	平均年齢（歳）
消防職員	４２．３
海上保安官	４３．１
警察官	４１．６
救急救命士	３９．８

内訳をみると，消防職員は50歳代が37.7%，40歳代が23.2%，次いで20歳代が21.0%，30歳代が18.1%であった。海上保安官は，40歳代が34.2%と最も多く，次いで50歳代31.6%，20歳代20.3%，30歳代13.9%であった。警察官は50歳代が32.2%，40歳代が26.6%，20歳代が22.5%，30歳代が18.0%であった。救急救命士では30歳代が40.7%と多く，次いで40歳代33.7%，50歳代15.1%，20歳代10.6%であった。

全体では，50歳代が31.2%，40歳代が27.2%，30歳代が20.8%，20歳代が20.4%であった。救援歴20年前後のベテラン者が多かった。

２．アンケート項目

職種により，若干の表現を変えたが，内容はすべて統一した。

「惨事の状況」ならびに「惨事時の気持ち」については，加藤（2001）の「災害救援者のチェックリスト」を引用した。また，「惨事後の気持ち」については，久留（2004）の「ＰＴＳＤ：DSM-Ⅳ修正版」を引用した。

Ⅳ．結果と考察

１．惨事後の気持ち（ＰＴＳＤ症状）

惨事後の気持ちについて，DSM-Ⅳ-TR（APA,2002）のＰＴＳＤの診断項目17項目の出現率を図１から図17に示した。

［再体験］（①～⑤項目）

①「そのとき」の出来事が繰り返し思い出された（図１）

消防職員，救急救命士の約５～６割（「時々」を含む）は，繰り返し思い出されたと回答していた。

小西（2001）によると，阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査（消防職員5103名中有効回答数4780名）では，「光景や感覚がぶり返す」という者は54%にみられたという。さらに，総務省消防庁消防課（2003）によると「消防職員の現場活動に係るストレス対策研究会」による調査（1900人：有効回答者数880名）結果では，惨事体験後２～３ヶ月後の症状として，「日中，何かのきっかけで災害現場の光景が目に浮かぶことがあった」者が25.8%であった。その数値からすると，今回の結果は，かなり高い数値であることが見出された。その他の項目についても，同様の結果が見出された。

廣川ら（2005）の海上保安官を対象にした調査（対象者384名）では，惨事体験者270名中26.7%に「現場の光景が目に浮かぶなどの感覚のぶりかえし」がみられたが，今回の調査結果ではその約２倍であることが明らかになった。

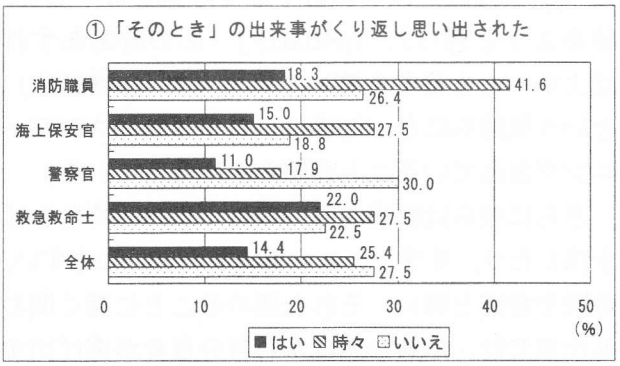

図１

②「そのとき」の出来事をくり返し夢にみた（図２）

夢に見た者が最も多かったのは，消防職員と海上保安官（「時々」を含む）であった。筆者が面接した中でも，腐乱死体（ご遺体）に接した時の感覚は今でも忘れないと言われていたことが印象に残っている。廣川ら（2005）の海上保安官を対象にした調査（対象者384名）では，惨事体験者270名のうち7.4%が悪夢をみており，今回の結果の方がより重篤であることが見出された。

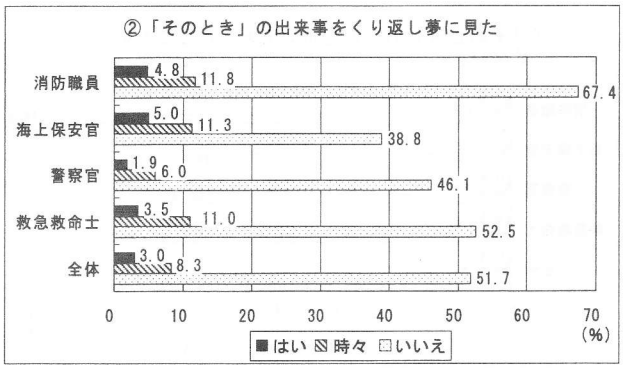

図２

③また「あのようなこと」がおきたのではないかとびっくりすることがあった（図３）

消防職員が23.3%（「時々」を含む）と最も多く，次いで救急救命士20.5%，海上保安官12.5%であった。

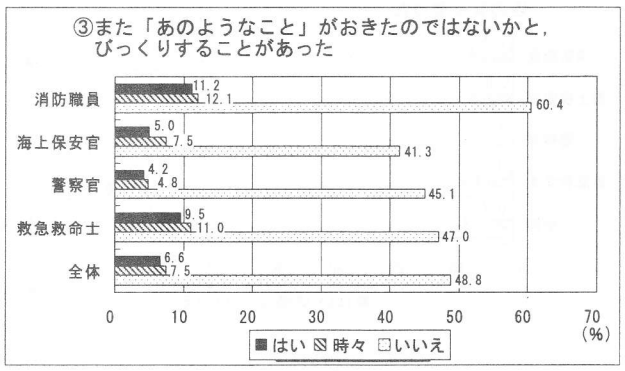

図３

④「そのこと」を思い出させるような物を見たり聞いたりすると心が痛んだ（図４）

消防職員が54.5%（「時々」を含む）と最も高く，次いで救急救命士42.0%，海上保安官28.8%であった。

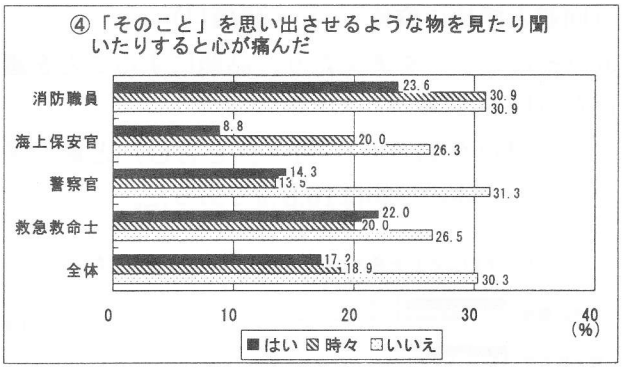

図４

⑤「そのこと」を思い出すと胸がドキドキしたり緊張した（図５）

「時々」を含めると消防職員31.5%，救急救命士25.5%の順で多くみられた。

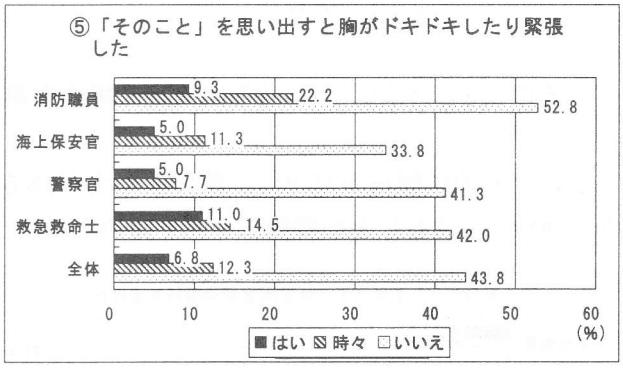

図５

以上，「再体験」の領域をみてきたが，全体の約３～４割が再体験の症状を有していることが明らかになった。他職種に比べ，消防職員は，惨事が繰り返し思い出され，フラッシュバックに苛まれやすいことが見出された。また，生理的反応（再体験による動悸，緊張）は消防職員の３人に一人の割合でみられ，警察官では４人に一人の割合でみられた。

総務省消防庁（2003）によると，消防職員が衝撃を受けた現場で感じた具体的な症状としては，光景の想起，非現実感，動悸などが多く，衝撃を受けた災害出場から２～３ヶ月経っても光景の想起（侵入）を示す人が体験者の25.8%を占め，体験者の７割強は何らかの症状を残していたという。今回の結果でも同様の傾向が見出された。

［回避と感情の麻痺］（⑥～⑫項目）

⑥「そのこと」を考えたり，話題にすることを避けた（図６）

消防職員が24.8%（「時々」を含む）と最も多かった。全体の平均は16.8%であった。

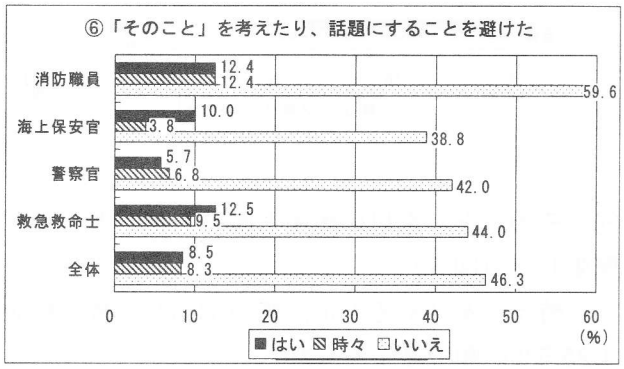

図６

⑦「そのこと」を思い出させる出来事や場所を避けた（図７）

ここでも消防職員が15.8%，救急救命士が15.5%（「時々」を含む）と他職種より高く認められた。

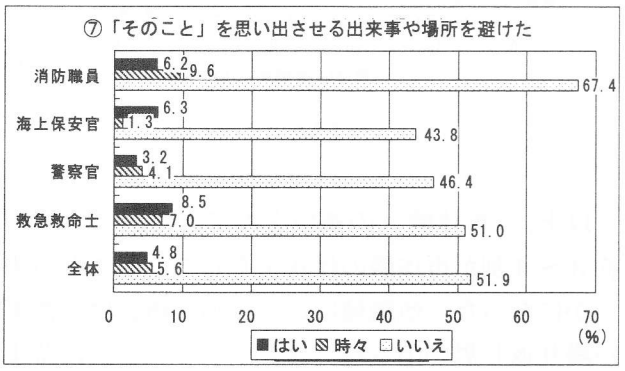

図７

⑧「そのとき」のことを思い出そうとしても思い出せない（図８）

これについては，ほとんどみられないことがわかった（全体の平均2.9%：「時々」を含む）。

小西（2001）によると，阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査（消防職員5103名中有効回答数4780名）では，「記憶があいまいである」者は36%であり，通常の惨事によるものよりも心の傷は深いものを感じさせる。

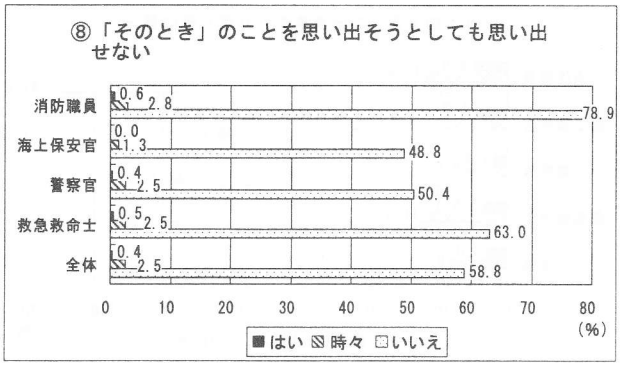

図８

⑨「そのこと」の後，趣味，仕事（任務）などに打ち込めなくなった（図９）

これについてもほとんどみられなかった（全体で3.4%：「時々」を含む）。

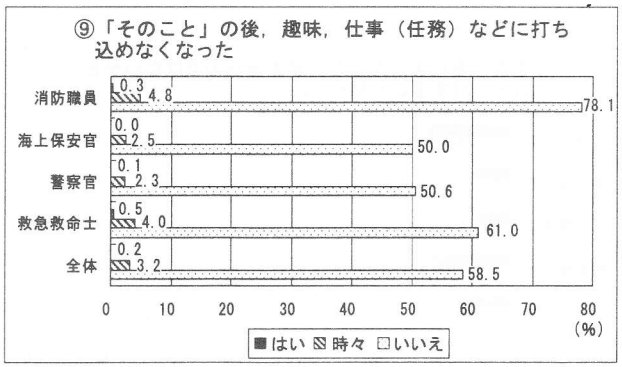

図９

⑩「そのこと」の後，一人ぼっちになった感じがするようになった（図10）

孤立感を感じる者も少なかった（全体で3.4%：「時々」を含む）。

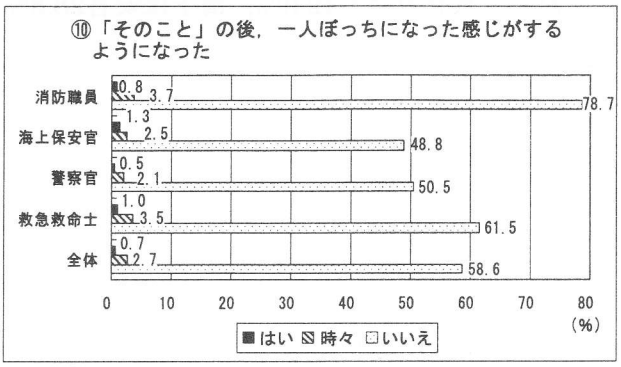

図10

⑪「そのこと」の後，うれしい気持ち，楽しい気持ちが少なくなった（図11）

快的感情の低下も全体で4.7％（「時々」を含む）であり，少ないようであった。

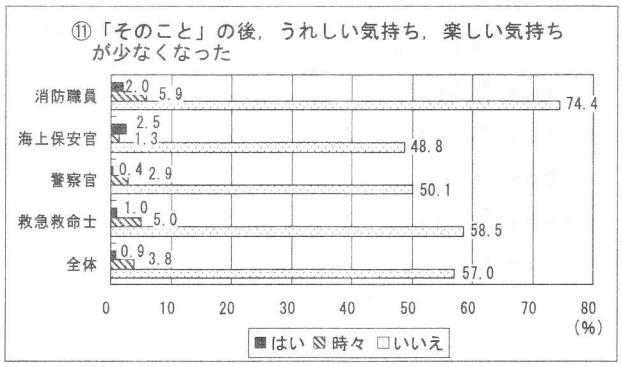

図11

⑫「そのこと」の後，将来のことを考えられなくなった（図12）

将来を考えられなくなったという者は，全体のわずか2.3％（「時々」を含む）であった。

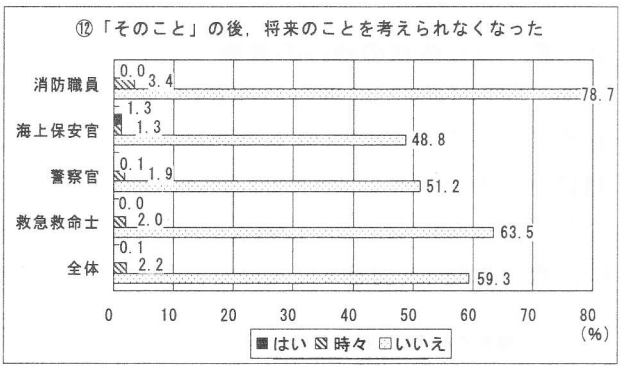

図12

以上，「回避と感情の麻痺」については，回避症状が１割程度にみられたものの，感情の麻痺といった症状はほとんどみられなかった。

［覚醒亢進］（⑬～⑰項目）

⑬「そのこと」の後，寝つきが悪くなったり，すぐ目を覚ましたりするようになった（図13）

睡眠障害は，「時々」を含めると救急救命士が14.5％と最も多く，次いで，海上保安官13.8％，消防職員13.7％であった。

小西（2001）によると，阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査（消防職員5103名中有効回答数4780名）では，「熟睡できなく，途中で覚醒する」者が41％にみられている。

廣川ら（2005）の海上保安官を対象にした調査（対象者384名）では，惨事体験のあった270名のうち，13.7％に睡眠障害がみられたが，今回の調査対象の海上保安官（特別救難隊）も同様の結果が示された。

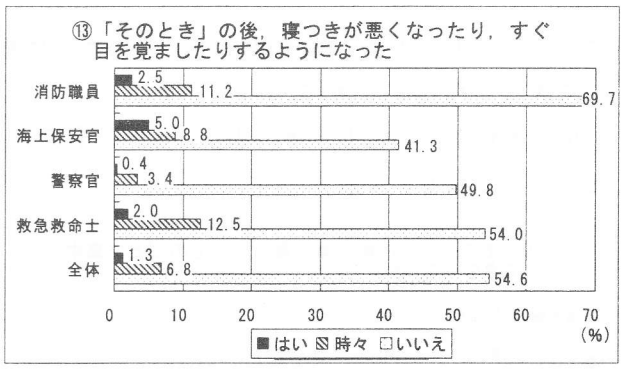

図13

⑭「そのこと」の後，ちょっとしたことで，カッとなり，イライラするようになった（図14）

易怒性や焦燥感については，全体の平均が5.4％（「時々」を含む）であり，20人に一人の割合でみられた。

小西（2001）によると，阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査（消防職員5103名中有効回答数4780名）では，「イライラしたり集中が困難」になった者は44％にみられた。再体験の症状は，本調査対象者に高くみられたが，覚醒亢進の症状については，阪神・淡路大震災の方が高いことが明らかになった。

今回の結果では，海上保安官（特別救難隊）は3.8％であったが，廣川ら（2005）の海上保安官を対象にした調査（対象者384名）では，惨事を体験した270名のうち12.2％にみられている。

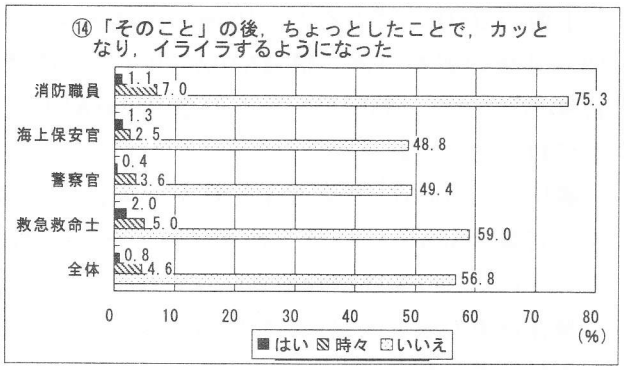

図14

⑮「そのこと」の後，気が散って，ものごとに集中できなくなった（図15）

集中困難についても全体の平均が4.2%（「時々」を含む）であり，少なかった。

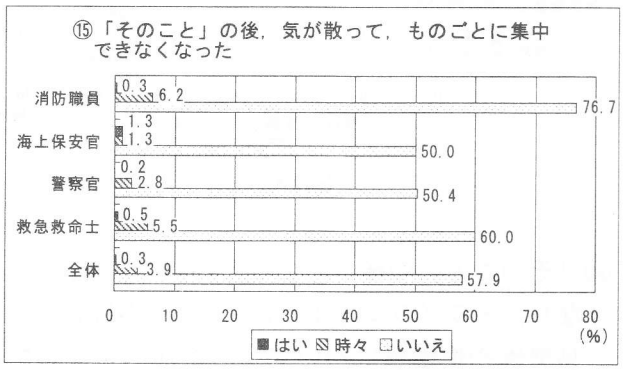

図15

⑯「そのこと」の後，ちょっとしたことに用心深くなった（図16）

過度の警戒心は，消防職員の約３割（「時々」を含む）にみられたが，他は１割前後であった。

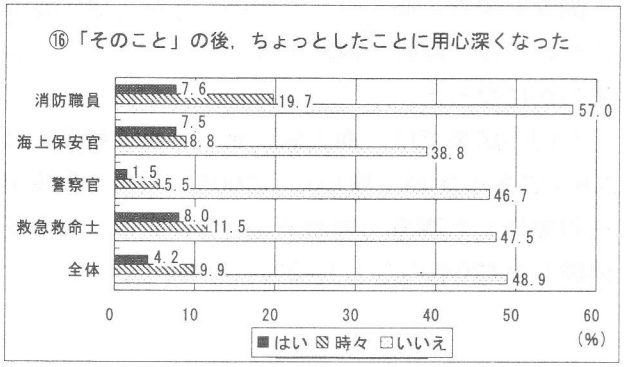

図16

⑰「そのこと」の後，ちょっとしたことにもひどく驚いたりするようになった（図17）

驚愕反応については，全体の平均が4.7%（「時々」を含む）であった。

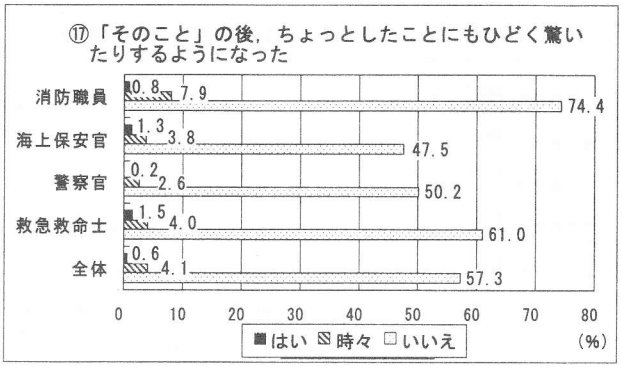

図17

以上，「覚醒亢進」の症状について，警戒心は消防職員の３割にみられたが，その他（睡眠障害，易怒性・焦燥感，集中困難，驚愕反応）については１割弱であった。

２．ＰＴＳＤ症状の残存の有無

１．でみられた17項目の症状について，現在もそのような状態にあるかを尋ねたところ，図41に示された通り，全体で7.9%は残存していることが明らかになった（図18）。特に高かったのは，救急救命士（9.0%）であった。

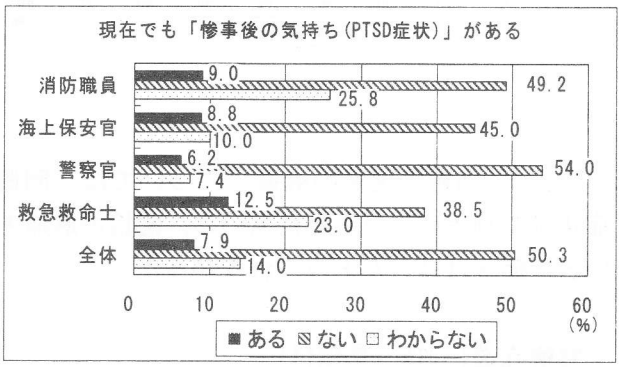

図41

３．ＰＴＳＤの出現率（アンケートでスクリーニングされた者）

表４に示されるように，平均して3.8%の出現

率であった。

予備群を含めると海上保安官や警察官に比べ，消防職員や救急救命士の出現率がかなり高く示されている。

表４　ＰＴＳＤ出現率（%）

	消防職員	海上保安官	警察官	救急救命士
ＰＴＳＤ	４．２	３．８	３．０	４．０
ＰＴＳＤ予備群	１４．０	３．８	１２．５	１２．５

注）PTSD予備群とは，「再体験（５項目）」「回避と感情の麻痺（７項目）」「覚醒亢進（５項目）」の３領域にわたり６項目以上の症状がみられるが，PTSDの診断基準を満たさないものとした。

Kesslerら（1995）による米国の一般人口に実施した疫学調査では，ＰＴＳＤの生涯有病率が全体で7.8%，男性の場合は5.0%，女性は10.4%と報告されている。

1983年にオーストラリアで発生した大規模な森林火災で活動した消防隊員を対象とした一連の調査（McFarlane,1987,1988,1989）では，ＰＴＳＤなどの心理的影響が遷延しやすいことが示され，42ヶ月目の段階で13%がＰＴＳＤと診断されている。Corneil(1995)は，カナダのトロントにおける消防職員1154名に調査をした結果，16.5%がＰＴＳＤであったと報告している。都市部郊外の消防士のサンプルでは，85～91%が心的外傷を負うような状況にさらされ，そのうち15～31%がＰＴＳＤになっていたという（Beatonら，1996)。Wagnerら（1998）は，ドイツのPheinland-Pfalz州における消防職員574名を対象にＰＴＳＤ症状尺度（PTSD Symptom Scale; Foa, et al.,1993）と精神健康調査票28項目版（GHQ-28）を実施し，両尺度得点の結果を基に，18.2%がＰＴＳＤであったと報告している。さらに，外傷性ストレス反応は，勤続年数と前月の苦痛な任務回数に関連するとされており，職務内容とは関連をもたないことが明らかにされた。

阪神・淡路大震災の被災地に勤務し，震災後の救援活動に従事した消防職員36名に震災後20～22ヶ月の時点で精神医学的面接を施行したところ，８名（22.0%）がＰＴＳＤと診断されている（岩井ら，1998)。小西（2001）によると，阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査（消防職員5103名中有効回答数4780名）では，ＰＴＳＤの可能性のある職員は18%（222名）にみられたという。また，阪神・淡路大震災から２年後の時点で，ＣＩＳへの曝露程度の高かった隊員の21.3%にＰＴＳＤ症状を認めたが，これは曝露程度の低かった隊員の8.3%に比べ，有意に高い割合であった（兵庫県精神保健協会こころのケアセンター，1999)。兵庫県精神保健協会こころのケアセンター（2000）は，1999年に，神戸市の消防職員を対象にした質問紙調査を行い，震災から４年後の時点で７%の職員がＰＴＳＤを示していることを明らかにしている。岩井ら（2002）による阪神・淡路大震災後の救援者の調査では，個人的な被災状況が深刻であったものほどＰＴＳＤ症状を多く示し，そのような中，過酷な業務に服したものではＰＴＳＤ症状が重症化しやすいことが明かになっている。

古賀ら（2003）は，福岡市消防職員870名を対象にして日常業務におけるＰＴＳＤなどのストレス反応を調査したところ，回答者618名中，77名（12.5%）がＰＴＳＤハイリスク群だったという。また，丸岡ら（2003）は，某市消防職員870名（有効回答者478名）を対象に，職場におけるＰＴＳＤをはじめとするメンタルヘルスに関する調査を行った。その中で，ＰＴＳＤのハイリスク群として抽出された95名のうち48名が面接調査に参加し，CAPS（Clinical Administered PTSD Scale）面接の結果，現在診断で３名がfull PTSD，３名がpartial ＰＴＳＤ（Blanchardによる定義）と診断された。

警察官に対する調査では，兵庫県警察本部（1996）が，阪神・淡路大震災時に活動した県内の警察官2854名のストレス反応に関する回答を分析し，“ＰＴＳＤは発生していない”と結論している。ただし，同調査では職場内での配布回収などの調査方法に問題があり，ＰＴＳＤ判断基準が曖昧であるなどの指摘もなされている（松井ら，2003）。

一方，Carlierら（1997）は，警察官を対象とした非常事態後の追跡調査の結果，７％にＰＴＳＤを認めている。また，Robinsonら（1997）による郊外の警察官のサンプルでは，13％がＰＴＳＤに罹患していたという。

その他，海上保安官，救急救命士に対するＰＴＳＤの調査はほとんどみられず，今回の結果は，今後のＰＴＳＤへの対策に大いに寄与するものと思われる。

＜引用文献＞

飛鳥井望　2001　ＰＴＳＤ及び惨事ストレスによる心的外傷後ストレス反応の理解　救急救命　第７号

Beaton ,R . ,Murphy ,S . & Corneil ,W . 1996 Prevalence of posttraumatic stress disorder symptomatology in professional urban fire fighters in two countries . Paper presented to the International Congress of Occupational Health .

Carlier ,I .V .E . ,Lamberts ,R .D . ,Gersons ,B .P .R .1997 Risk factors for posttraumatic stress symptomatology in police officers ;A perspective analysis .J . Nerv Ment Dis 185 ;498-506 .

Corneil ,W .1995 Firefighters' PTSD at dangerous levels .APA Monitor ,26 ;36-37 .

For ,E .B . ,Riggs ,D .S . ,Dancu ,C .V . et al . 1993 Reliability and validity of a brief instrument for assessing post-traumatic stress disorder .J .Traumatic Stress ,6 ;459-473 .

Gersons ,B .P .R . ,Carlier ,I .V .E . 2000　災害救助業務に関連した心的外傷への治療的介入（警察官および消防士など）　松下正明総編　臨床精神医学講座６　外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）　中山書店

廣川進・飛鳥井望・岸本淳司　2005　海上保安官における惨事ストレスならびに惨事ストレスチェックリストの開発　トラウマティック・ストレス　第３巻第１号　日本トラウマティック・ストレス学会

久留一郎　2004　ＰＴＳＤ：ポスト・トラウマティック・カウンセリング　駿河台出版社

兵庫県警察本部　1996　阪神・淡路大震災における警察官の救援活動および被災体験とPTSD　兵庫県警察本部発行

兵庫県精神保健協会こころのケアセンター　1999　非常事態ストレスと災害救援者の健康状態に関する調査研究報告書－阪神・淡路大震災が兵庫県下の消防職員に及ぼした影響－

兵庫県こころのケアセンター　2000　災害救援者の心理的影響に関する調査研究報告書　阪神・淡路大震災が消防職員に及ぼした長期的影響

岩井圭司・加藤寛・飛鳥井望・三宅由子・中井久夫　1998　「災害救援者のＰＴＳＤ－阪神・淡路大震災被災地における消防士の面接調査から－」　精神科治療学　13（８）　971-979

岩井圭司・加藤寛　2002　「災害救援者－阪神・淡路大震災の救援業務に従事した消防職員と、避難所の運営にあたった公立学校教職員の健康調査にみられたPTSD症状」　臨床精神医学増刊号

加藤寛　2001　６．災害救援者　厚生労働省精神・神経疾患研究委託費　外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究班　主任研究者　金吉晴　じほう

Kessler ,R .C . ,Sonnega ,A . ,Bromet ,E . ,Hughes ,M . ,Nelson ,C .B . 1995 Posttraumatic Stress Disorder in the National Comorbidity Survey ,Archives of General Psychiatry ,52 ;1048-1060 .

古賀章子・前田正治・進藤啓子・丸岡隆之・川村則行　2003　消防業務とトラウマティック・ストレス－福岡市消防隊員に対する疫学調査の結果から－　九州神経精神医学 49（１）　44-49

古賀章子・前田正治・津田彰　2003　消防隊員とトラウマティック・ストレス　久留米大学心理学研究第２号　89-96

小西友紀　2001　震災後の消防職員と心的外傷後ストレス　労働の科学　56巻11号　12-15

McFarlane ,A .C . 1987 Life events and psychiatric disorder ;The role of a natural disaster .Br .L .Psychiatry ,151 ;326-367 .

McFarlane ,A .C . 1988 The aetiology of post-traumatic stress disorders following a natural disaster . Br .J

.Psychiatry ,152 ;116-121 .
McFarlane ,A .C . 1989 The aetiology of post-traumatic morbidity ;Predisposing ,precipitating and perpetuating factors .Br .J .Psychiatry ,154 ;221-228 .
丸岡隆之・前田正治・矢島潤平・進藤啓子・古賀章子・牧田潔・川村則行・稲本絵里・柳田多美　2003　消防隊員に関するＰＴＳＤ調査　季刊精神科診断学　第14巻第１号
松井豊・畑中美穂　2003　災害救援者の惨事ストレスに対するディブリーフィングの有効性に関する研究展望１　筑波大学心理学研究第25号
餅原尚子・久留一郎　2005　惨事ストレス（CIS）、外傷後ストレス障害（PTSD）に関する実態調査～惨事状況とストレスの関係に視点をあてて～　日本心理臨床学会第24回大会　発表論文集
Robinson ,H . ,Sigman ,M .& Wison ,J . 1997 Duty-related stressors and PTSD symptoms in suburban police officers .Psychological Reports ,81 ;835-845 .
総務省消防庁　2003　「消防職員の惨事ストレスの実態と対策の在り方について（概要）」　月刊フェスク（259）
総務省消防庁消防課　2003「消防職員の惨事ストレスの実態と対策の在り方～消防職員の現場活動に係るストレス対策研究科報告書～」　近代消防2003年６月号
Wagner ,D . ,Heinrichs ,M . ,Ehlert ,U . 1988 Prevalence of symptoms of posttraumatic stress disorder in German professional firefighters .Am .J .Psychiatry ,155 ;1727-1732 .

Stress in Fire Fighters, Coastguard Officers, Policemen and Emergency Medical Rescuers: A Clinical Psychological approach (Ⅲ)
～PTSD～

Disaster experiences have great influence on rescuers as well as direct victims. In line with what preceding research has made clear in foreign countries, the occurrence rate of post-traumatic stress reaction in Japanese rescuers is also very high. Rescuers involved in a disaster also suffer from the same stresses as victims in meeting with a disaster. Moreover, they are professional rescuers and take other kind of stresses. For example, they cannot avoid going to a disaster scene. They are subject to social expectation and have some strong professional sense, such as a duty or responsibility to live up to. There is also some atmosphere in an organization that means they cannot complain to or consult with anyone. If they are gagged, the matter must be worse.

The purpose of this treatise was to analyze the PTSD (Post-traumatic Stress Disorder) in fire fighters, coastguard officers, policemen and emergency medical rescuers and to clarify the features of their stresses.

We sent out a questionnaire and received replies from 356 fire fighters 80 coastguard officers, 854 policemen and 200 emergency medical rescuers.

As for PTSD, fire fighters and emergency medical rescuers are more likely to suffer from it than policemen. The average rate of those who are sorted out PTSD one month after they experienced a critical incident is 3.8%. Fire fighters and emergency medical rescuers including hidden patients are much more likely to suffer from PTSD than policemen and coastguard officers.